

## 「フランスでも通用した川越高校の神通力」

山本眞次 （高23回、1971年卒業）

皆様こんにちは。1978年10月15日以来パリ在住の山本眞次です。昨年12月、45年ぶりに母校を表敬訪問した際、同窓会の金子保夫事務局長から、私の人生経験談を現役の川高生に伝えるべく執筆を依頼されました。

私は、入間市立豊岡中学校出身で、中学2年までの成績は中の上程度でした。同級生は300人で、3年生になると成績が急上昇し、学力テストでは遂にトップ3に入るまでになりました。こうなると、私の地域では進学先として川高が視野に入って来るのは自然です。私は川高受験を決断しました。というのも、川高は昔から埼玉三大名門校と認知され、伝統の旧制中学、男子校、私にとりこれ以上ない立派な高校に思えたからです。

結果、運良く合格。その時私は、生まれて初めて世間から認められたと思いました。同級生からは憧憬の目で見られ、全く知らない人から合格祝いを頂戴するほどでした。川高の価値を知る私の叔母は、「眞次、川中（川高）に受かったんだって、よかったねえ」と大変な喜びようであったことがまるで昨日のように鮮明な記憶として私の脳裏に焼き付いています。

さて、念願の川高に入って感じたことは、私より優秀な生徒がたくさんいて、自分は大したことないということでした。私は男だけの川高の雰囲気が好きでしたが、怠け者のため成績は落ちる一方で、ある時の実力テストでは、450人中438番という体たらくでした。このように私は劣等生でしたが、優秀な先生方のお陰で「いくつかの重要な考え方」を学び、成績はさておき、以後生きるための基礎学力は身に付いたと思います。その後受験勉強を負担に感じ大学受験は断念しました。

川高卒業後は、何の目標もなく、中小零細企業の正社員や多くのバイトをしてきました。が、日本企業の独特な風習になじめず苦しみ、どうしたら良いのかと悩み続けていました。こうして日本社会に向いていないと思った私は、状況を打開するためあることを思いつきました。元々映画、音楽、小説等フランス文化やフランス語に憧れていたこともあり、フランスに留学しようと考えたのです。悪く言えば逃避になりますが、疎外感を感じていた日本社会と決別し、未知の世界に身を置こうと決意しました。そうなる一番重要なのは言語で、ゼロから始める必要がありました。初めて学ぶフランス語は完全な独学で、文法書とカセットテープを使い勉強しました。同時に、都心の高級レストランで正社員ウェイターとして働き、フランスで3年間生活できる資金を稼ぎました。必要に迫られて勉強したフランス語は、次第に好きになり、78年に渡仏した時点で普通の会話に支障はありませんでした。

学校はリヨン大学に決め、外人講座でフランス語を磨き、翌79年に文学部に入学できました。試験は口頭試問だけでした。1981年7月フランス人女性と結婚し、翌8月に長女が生まれ、当然学業を断念して職探しに奔走しました。結果、川崎重工に1年契約で通訳兼翻訳士

として採用され、チュニジアに派遣されました。給料は非常に高額でしたが、長くやる仕事ではないと感じ、在任中パリの複数の日系大企業に履歴書を送付し転職の道を探りました。更に、川重の契約延長打診を断りリヨンの自宅に戻った翌日、日本通運から連絡があり、面接の結果、管理職として採用されました。

面接時、私は希望の給与額と管理職採用という条件を、日通に受諾してもらうことに成功しましたが、私は元々、相手の条件を従順に受け入れる性格ではありませんでした。国際運送の知識など全くありませんでしたが、短期間で習得し、顧客に信用されるようになりました。この辺は川高で身につけた基礎学力の賜物です。その後、取引のあったフランス最大手の海外引越会社にスカウトされ、33歳で日本部長として迎えられました。順調に業績を伸ばす私が他社へ移籍するのを恐れたオーナー社長は、「別会社を設立して社長になってくれ」と言ってきたため、引き受けました。別会社の社長になりましたが、私の会社が元受けて、共同出資者のフランス人社長の会社は下請けの立場になりました。その後、私は自分の会社の持ち株を同社長に売却し、業界から引退しました。

要約ですが、私は以上の経過を経てフランスで生き残れました。理由を分析すると次のようになります。

- 1) 公私にわたり重要な局面で迅速な決断をした
- 2) 複数の選択肢がある中、勇気を持って良いと思えた選択をした
- 3) リスクを恐れず起業した
- 4) 日系企業に頼り過ぎなかった  
(彼らの相次ぐ撤退で数千人の一流大学出の現地日本人が失業した)
- 5) 運が良かった

一番重要なことは、「他者から必要な人物と思われる」ことではないかと私は思います。私程度の人間が言うのもおこがましいことですが、「誠実であること」や「正しく美しい日本語を話すこと」もその人の品格を確固たるものにすると私は思っております。

優秀で若い川高生の皆様、皆様でしたら日本を再生させることが可能です。劣等生の私でさえ異国の地で生きられるのですから。どうぞ視野を広げてください。チャンスは日本だけにあるものではなく、世界にもあります。差別はありますが、成功した者が勝者です。

最後に、金子事務局長に見送られ母校を去る際、私は正門前で、生きる術即ち学問をお教えたくださった全ての先生方、諸先輩、川高の象徴であるくすのき、その他全ての施設に対し、私の真の感謝の気持ちを表すため、深く深くお辞儀をしました。ありがとうございました。

川越高校に栄光あれ。